



医療関連事業部から

医療関連事業部 部長
藤井 美穂

医療関連事業部では、勤務医・女性医師の勤務環境改善、医師会立准看護師養成校の支援、医療他職種との連携、医学部学生・研修医とのパイプ作りを目標に据え活動してきた。事業部の名称通り、かかわる内容の範囲は広い。勤務医の問題解決には地域医療構想の方向性を知ることが必須であり、育児しながら勤務する女性医師にはパートナーの勤務環境の改善がなければ仕事の継続は難しい。薬剤師や看護師など医療他職種における問題は医師の偏在と同様、地方での不足をどう是正するかが大きい課題になっており、行政や教育機関との調整も本事業部の重要な仕事である。これら多くの課題の解決に向け、医療関連事業部では2年間どのように活動してきたか振り返りながら、事業運営を行う上での医師会内での課題についても触れてみたい。

1) 勤務医・女性医師の勤務環境改善

都市部の無床診療所の増加の反面、病院、有床診療所が減少している全国的な傾向は、北海道も同様である。道内の地域医療を守る医師達の現状を課題解決に反映するために、毎年2回地域を訪問し、勤務医の諸先生と懇談している。今期2年間に旭川、室蘭、帯広、滝川で開催した懇談会では、当直の際、時間外に受診した患者に専門医の対応を迫られ困ったこと、医師側からも専門診療科以外の患者を診るのは苦痛であるという現場の声を聞き、すべての地域に専門診療科の医師がいるはずもない現状では、いわゆる総合診療の必要性を痛切に感じた。また地方病院では、整形外科領域の外傷をはじめ、状態の悪い患者の全身管理、麻酔管理などすべてを外科医師が担当しなければならないために、週100時間に達する勤務環境があり、週末家族の待つ都市部の自宅に帰れず、家庭崩壊につながるなどの切実な現状もあがってきた。私も6年目の単身赴任での地方出張時、夜間の分娩の呼び出しが続くため1年半、病院に泊まっていたことを思い出しながら、長期間にわたる場合、医師の立ち去りに直結する可能性の高い現状を解決する必要性を感じながらも、即決できる具体的手段がないことに歯がゆく感じている。

広域な北海道の地域医療の課題を解決しようと勤務医部会運営委員全員で作り上げた「勤務医の過重

労働を改善するために「勤務医部会報告」に是非、目を通していただきたい。現状分析を改善のアクションにつなぐために、継続的に活動していく予定である。

女性医師の勤務問題については、日本医師会が最重要課題の一つと捉え、男女共同参画委員会、女性医師支援委員会をベースに大学医学部、行政と連携しながらさまざまなフォーラム、協議会を設置し活動しているが、道医の活動は全国的にもモデルと評価される内容である。平成23年に開設した女性医師等支援相談窓口ではアクセスいただいた多くの女性医師たちのキャリア継続を支援してきた。復職支援では男性医師も含め、8名の医師が地域医療に貢献する道をお手伝いしている。窓口利用の医師たちから「この支援相談窓口は私たちの医局」と言われ、医師会との太いパイプができていることは、医師会の財産ではないだろうか。また日医の「2020.30」推進懇話会への参加立候補をしたモチベーションの高い女性医師たちが地元北海道でも医師会活動に参画していただけるように道医では懇談会を開きながらパイプ作りをしている。

2) 医療他職種との連携および医師会立准看護師養成校の支援

チーム医療を構築していくためには他職種との情報交換が重要である。「北海道医療・福祉関係機能団体等懇談会」は、これまで年に1回、35団体から2団体ずつ情報提供をしていたが、地域医療の新しいあり方を検討するために、もっと時間をかけることにし、年2回1団体ずつ意見交換する場とした。地域間格差をどのように是正するか、学生教育、卒後教育の場の確保、指導のあり方については行政が介入しなければならない解決の着地点が見えてきた。

医師会立准看護師養成校の実習場所確保、指導教官の再教育については毎年問題点としてあげられるが、解決を見ない。これら卒業生がどれだけ地域に定着し、地域医療に貢献しているかについて、具体的データを集計し行政に提示してきたが、日医だけでなく全国の医師会総意を示し、中央行政への強力な働きかけが必要であることを痛感している。

3) 医学部学生・研修医など次世代とのパイプ作り

本事業部では学生、研修医とともに、明日の北海道、日本の医療を語る場面が多い。「もしも北海道知事なら、厚生労働大臣なら」と題し、彼らが主導し討論を進める意見交換会をしているが、新しい発想での医療改革案が飛び出す反面、自分たちが地方での医療を行う際に家族や子どもの教育問題、キャリアを磨くライフプランへの障害など、具体的な指摘